

ワークショップ

座長：岡村 菊夫（東名古屋病院）

寛 善行（香川大学）

③ LOH 症候群における漢方療法の有用性

独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）仙台病院 泌尿器科
並木 俊一、相沢 正孝、工藤 貴志、庵谷 尚正

【緒言】

加齢男性機能低下（LOH）症候群の治療の原則は男性ホルモンの補充である。しかしながら補充療法を希望しない場合や血中男性ホルモン値では補充療法の適応とならない場合には、しばしば漢方療法が行われる。LOH症候群における漢方療法の有用性を検討した。

【対象および方法】

LOH症候群の精査・加療を希望して当院外来を受診し、漢方薬内服による治療を行い3-6ヶ月後に治療効果判定が可能だった5名を対象にした。

治療効果判定は自覚症状についてはaging male symptoms score (AMS)、IIEF-5、IPSSを用いた。ホルモン検査は総テストステロンおよび遊離テストステロン、LH、FSH、PRLを測定した。

【結果】

平均年齢は61.2(50-75)歳、BMIは24.3(18-29)kg/m²だった。PSAは1.1(0.01-3.8)ng/ml、前立腺体積は21(5-37)ccだった。AMSは46(32-62)、IIEFは2.8(2-5)、IPSSは10.4(3-17)だった。漢方薬剤は加味逍遙散が1例、補中益気湯が4例だった。治療後の総テストステロンおよび遊離テストステロン値は変化を認めなかった。AMSは37.8(26-53)と有意に改善を認めた(P=0.005)。IIEFは5.0(1-11)およびIPSSも7(3-15)と改善傾向を示した。副作用による投与中断の症例はなかった。

【結論】

LOH症候群に対する漢方療法は、自覚症状の緩和に有効であり、安全性も高いと考えられ、LOH症候群治療の選択肢となると考えられた。